

ださる方だったんですけど、端から見てもヘトヘトっていう感じがあって、ご本人も、もう無理かもしれないっていう風に、何かちょっとふざけた感じでおっしゃっていたのもあって、ああ忙しいんだなって思っていました。高校になってからは、部活で夜遅くまでの自分が残ってる時に、先生たちがそれ以上に遅くまで残っていたりとか、後は結構教師と仲良かったので、『大変なんですよ』とか言うと、『いや、本当に大変…』みたいな感じで聞いたりとか、そういう感じでした。」

A の場合は、教員とのコミュニケーションを密にとっていたこともあって、「多忙化をなんとかしたい」と思い、教育学部を志望するという点で特殊な例であるのかもしれない。

このほか、家族が教職の仕事を始め、その大変さを身近で見聞きすることで距離を取るようになった者もいる。B はその典型例である。もともと保育士として働き子育てを理由にキャリアを中断していた母親が一念発起して、不足していた単位を通信制課程で修得し、小学校教員として働き始め担任も持つことになった。あとで触れる教育実習の影響もあるが、身近な存在が楽しみながらも教育現場の現実に苦しむ姿に接したことが彼女の教職への意欲に影響したようである。

しかし、これらの事例を含めて、今回のインタビューはそれでも入学までは教職への期待を一定程度持ち続けた、いわば比較的「有望な」学生たちであることに留意したい。

②教育実習を契機とする教職離れ

一定の教職希望を保持してきた学生たちではあるが、種々の情報を得てさまざまな経験を経ることで、教職から他職へと志望を変更していく。その際に、大きなハードルとなるのが「学校をめぐる困難な現実」である。それをありのままに知る機会として圧倒的に重要な経験が、教育実習である。もちろん、教育実習は教員の職業的な魅力を実感し、より深く知る好機ともなることは言うまでもない。むしろこれまでの常識からすれば、大学でどちらかといえば抽象的・理論的なことを学んでいた学生が実際に児童・生徒とかかわり、半ば「一人前の教員」として扱われることによって、いくらかの不安を抱えながらも教職に就く気持ちを確認なものにする機会となっていた。

たとえば、比較的早い段階で教職希望を失い、公務員に合格したあとで中学校の教育実習を経験した G は、小学校での実習では芽生えなかった気持ちが湧いてきたという。

「元々その教員になる可能性というか、なりたいという気持ちは、正直その、就活をしている段階で殆どなくて 0 に近いほどなくて。教員にはこれから、今もこれからも絶対ならないっていう気持ちだったんですけど、ついこないだ、その中学校の方に実習に行って、その中学校での実習がすごく楽しかった。公務員としての将来が決まっちゃった後だったんですけど。その実習でちょっとその教員になりたいっていう思いが少し強くなったかなっていうふうに思います。」